



防災教育チャレンジプラン

FM放送を用いた災害時情報提供支援

防 災 に 関 す る 講 演 会
災害時放送ボランティア講習会

■ 日 時 平成17年7月30日(土)

報 告

実践団体 : 三田を知る会

主 催 : 防災教育チャレンジプラン実行委員会

後 援 : 内閣府・総務省消防庁・文部科学省 他

目 次

	(ページ)
1 FM放送を用いた災害時情報提供支援事業について	1
防災に関する講演会	3
2 「三田市での台風時の対応」	6
三田市総務部総務課副課長 鹿嶽 昌功 氏	
3 「災害救援に携わって・・・」	8
日本災害救援ボランティアネットワーク理事長 田中俊昭 氏	
4 「スマトラ沖地震・スリランカ津波被害を経験して」	10
関西学院大学 総合政策学部 岡本 有未 氏、古井 健斗 氏	
災害時放送ボランティア講習会	16
5 講習会内容	18
6 災害放送におけるFM放送の課題	22

FM 放送を用いた災害時情報提供支援事業について

第2回防災教育チャレンジプランに採択され7月30日(土)に、高校生を中心として地域と連携して防災意識を高めるための防災に関する講演会と、災害時に地域に密着したこまめな情報を提供する FM 放送でアナウンスが出来るボランティアを養成する講習を災害時放送ボランティア講習会として行いました。

講演会及び講習会のどちらも、高校生を中心として参加者を募って開催いたしました。が防災に関する講演会では、参加者40名でその中でも高校生が少なく地域の防災関係の方々が中心となりました。また、災害時放送ボランティア講習会は参加者12名で中学生が中心となり高校生は少なかったのですがシニアの方々も参加して下さいました。

防災に関する講演会は、三田市立フラワータウン市民センターで午前10時30分から12時30分まで「三田市での台風時の対応」として三田市総務部総務課副課長 鹿嶽 昌功(かたけ まさのり)氏に、「災害救援に携わって・・・」として日本災害救援ボランティアネットワーク理事長 田中俊昭(たなか としあき)氏に、「スマトラ沖地震・スリランカ津波被害を経験して」として関西学院大学総合政策学部4回生の岡本 有未(おかもと あみ)氏、3回生の古井 健斗(ふるい けんと)氏の方々に講演等をしていただきました。

内容は、鹿嶽氏から身近にあった三田市内での昨年台風があった時の三田市としての対応それ以降の取り組みなど、田中氏からボランティアとして国内の日本海重油流出事故、中越地震や国外のトルコ・台湾の地震災害の救援活動に当たった経験と FM 放送の災害時における有効性など、古井氏からスリランカにおいて津波被害にあった経験などについての講演と、岡本氏から避難する場合の持ち物についてのワークショップを行いました。

災害時放送ボランティア講習会は、会場を徒歩5分足らずのハニーFMスタジオに変えて13時30分から15時30分まで、災害時に FM 放送でアナウンスが出来るボランティアを養成する講習会をハニーFMスタッフの指導のもとに講習を行いました。

内容は、災害時におけるラジオ放送の役割として、昨年の災害時放送実績、「新潟県中越地震」における FM 放送(FM ながおか)の動きを説明し、災害時の対応としての FM 放送(ハニーFM)非常災害時特別放送実施マニュアルの説明、緊急放送切り替え手順の説明、災害時緊急放送コメント、レポートコメントの説明があり、災害時緊急放送シミュレーションをハニーFMスタッフの指導のもとに参加者が行いました。

防災に関する講演会及び災害時放送ボランティア講習会を終えてその効果を考えてみますと、兵庫県三田市は災害が少ない地域であるために、防災意識が低いとされていますが、高校生を中心に地域の方々と連携をとって防災意識を高めていこうという企画をたてましたが、その目的から言えば高校生の参加が少なかったのですが、地域全体が連携して防災意識を高める一助になったと思います。

今回の講演会・講習会への反省として参加者が少なかったことが考えられその原因としては日程と広報の問題が考えられます。

日程については、学校行事と重なったりしましたので、学校行事の日程を含めて他の行事日程の確認・調整をする必要があると考えています。これは、今回の講習会に限らず他の講習会・講演会等を含めた各種イベントの開催が重複したりすることから、その解消へ向けての提案がなされています。

広報については、学校へチラシ等の配布だけでなく事前の趣旨の説明を行う必要があり、今回の講習会は特にその特徴など教育委員会を通じて校長会などの場で講習会の内容をプレゼン等の説明する等の個別の広報活動が必要であると考えています。

今後の防災に関する講演会については、今回の内容を踏まえて参加者を始めとした多くの人から意見を聞きテーマを選んでいく必要があり、災害時放送ボランティア講習会については、実際の災害時を想定し、今回、緊急放送時アナウンスの仕方を体験して頂きましたが、受講者からの声として現場リポート、情報収集の仕方等に広げて体験していきたいとの希望があり、災害時のボランティアの活動範囲を広げたいと思います。

防災に関する講演会及び災害時放送ボランティア講習会を開催して不十分な点は上記に記載しましたようにありましたが、徐々にではありますが防災意識の高揚が感じられてうれしく思っています。

今回の防災に関する講演会と災害時放送ボランティア講習会を開催するに当たりまして講師の方々や広報についてご協力頂いた関係各位には感謝を申し上げます。

今後とも地域の防災に役立つことをやって行きたいと思いますのでよろしくお願いします。

防災教育チャレンジプラン

実践団体：三田を知る会

代表 堺 末 廣

防災についての講演会

- ・ 「三田市での台風時の対応」

三田市 総務部 総務課 副課長

鹿嶽 昌功 氏

- ・ 「災害救援に携わって・・・」
(中越地震災害やイランなど)

日本災害救援ボランティアネットワーク

理事長 田中俊昭 氏

- ・ 「スマトラ沖地震・スリランカ津波被害を経験して」
関西学院大学 総合政策学部

岡本 有未 氏

古井 健斗 氏

講師・講演内容等紹介

鹿 嶽 昌 功 （かたけ まさのり） 氏 三田市 総務部 総務課 副課長

「三田市での台風時の対応」として、昨年10月にありました台風により三田市内においても被害があり、その時の状況や救助活動などについてお話ししていただきます。

また、三田市としてこの経験を生かして台風時の防災活動や台風に備えた日常の活動についてお話しし

田 中 稔 昭 （たなか としあき） 氏 NPO法人 日本災害救援ボランティアネットワーク 理事長

1995年から阪神・淡路大震災直後に誕生した西宮ボランティアネットワークの活動に参加。99年特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワークの設立に伴い理事長に就任。

これまでに、国内の災害では日本海重油流出事故災害のコーディネート業務に携わったほか、トルコ・台湾の地震災害では現地入りして救援活動に当たり、04年の中越地震の際は、翌日現地入りし、ボランティアセンター立ち上げなどに協力した。現在は、現地に拠点を設け被災者支援活動を行っている。

岡 本 有 未 （おかもと あみ） 氏 関西学院大学 総合政策学部 4回生

高校時代からCCSというボランティア団体に所属し、国際協力や途上国援助に興味を持ち、同大学で研究。大学から、2004年10月より国連情報技術サービス（UNITeS）の一員としてスリランカのコロンボから約20キロ離れた小さな村Malamullaへ派遣される。

古 井 健 斗 （ふるい けんと） 氏 関西学院大学 総合政策学部 3回生

2001年開催のiEARN国際会議でボランティアの情報技術支援、通訳を担当。後に国際舞台での情報教育の機会であるUNITeS（国連情報技術サービス）に国連インターンとして派遣される。同機関で活動中の昨年12月、スリランカ南部のUnawatunaで津波に被災する。

講演会風景



(2)課題と見直し

①配備体制の前倒し

- ・警戒体制と災害対応体制の明確化
(災害が発生するまでは警戒体制、災害通報が入った段階で災害対策本部設置)
- ・各配備体制における人員の見直し
(水防(防災)2号で事務・技術職員はほぼ全員(620人)、3号で全職員(約1,250人))

②情報の収集、分析と発信

- ・各所管課が収集する災害情報の一本化
〔本部事務局機能の充実⇒災害関係情報はすべて本部事務局へ入り整理分析できる仕組みづくり〕
- ・現場対応班の集中待機
〔土木班・農林班・公園班等の現場対応班は、一本化された本部事務局の指示のもと対応を行う〕
- ・災害状況の周知
〔災害現状・対応状況、気象情報等を整理し、定期的に情報発信
・・・市ホームページ即時更新、ハニーFM、新聞・テレビ局等への情報提供〕

③避難所の運営

- ・収容避難所(各小中学校28箇所)+市民センター等
- ・市民センター等を消防団拠点施設として位置づけ、災害対策本部・消防本部・消防団の連絡体制の確立(消防団の避難誘導等の支援)
- ・避難所運営班を福祉部局から教育委員会へ
- ・福祉部局は災害時要援護者対応を中心に

3 防災マップの作成

(1)三田市の土砂災害等危険箇所

- ・土石流危険渓流 192箇所
 - ・崩壊土石流危険地区 32箇所
 - ・地すべり危険箇所 6箇所
 - ・急傾斜地崩壊危険箇所 214箇所
 - ・山腹崩壊危険地区 19箇所
- 計 463箇所

(2)土砂災害相互通報システム整備事業による危険箇所の公表(防災マップ)

- ・Web-GISによる防災マップを三田市のホームページで公表
- ・市民の災害への意識高揚と、災害発生時の被害の軽減を目的に整備
- ・避難所、救急病院等災害関連施設検索
- ・その他公共施設検索、避難所までの距離測定、面積測定など

お問い合わせ

〒669-1595 三田市三輪2丁目1番1号 三田市役所 総務部総務課

電話 災害時は「災害対策本部」079-563-1111(代表)

平常時は 総務課まで 079-559-5031(直通)

平成 17 年 7 月 30 日
防災についての講演会 資料

三田市での台風時の対応

1 三田市と災害

(1) 過去の災害

昭和 20 年 (1945 年) 10 月 9 日～10 月 13 日 阿久根台風
死者 377 名、行方不明者 74 名、負傷者 202 名、住家損壊 6,181 棟、浸水 174,146 棟など
兵庫県 200 名を越える死者 三田市 死者 4 名、行方不明 7 名

(2) 昨年の風水害

6 月 21 日 台風 6 号 連続雨量 56.5mm

大きな被害なし

8 月 30 日 台風 16 号 連続雨量 78.5mm 強風による被害

道路通行止 4 件、住家一部損壊 24 件、風倒木多数

9 月 7 日 台風 18 号 連続雨量 3.0mm 風倒木など暴風の被害

重傷者 1 名、自主避難 1 世帯 2 人、住家一部損壊 26 件
道路通行止 5 箇所、神戸電鉄・神姫バス運行中止、J R 新三田駅以北不通

9 月 29 日 台風 21 号 連続雨量 118.0mm 大雨の被害

床下浸水 3 戸、住家一部損壊 5 件、道路冠水 2 箇所、土砂災害 2 箇所

10 月 8 日 台風 22 号 連続雨量 38.0mm

大きな被害なし

10 月 20 日 台風 23 号 19 日から 20 日連続雨量 253mm 大雨、暴風による被害

軽傷 3 人、床上浸水 1 戸、床下浸水 25 戸、住家一部損壊 96 件、避難勧告 2 人(1 世帯)、
自主避難 119 人(46 世帯)、道路通行止 21 件、道路冠水 13 件、山腹崩壊等 11 箇所、
神戸電鉄、神姫バス不通、J R 福知山～広野間一時運転中止

特に、フラワータウン 15 時～17 時 3 時間で 108mm 降雨

武庫川(下田中)では、危険水位 6.5m(堤防高 7.5m)に対して 6.29m まで上昇

・青野ダム洪水調節(下流への放流を減らす)により、約 60 c m 水位を低下(推定)

2 昨年の経験を生かした見直し

(1) 台風 23 号時の配備体制

10 月 20 日

7 時 30 分 待機配備体制 (市職員 16 名)

13 時 00 分 初期警戒配備体制(市職員 105 名)

16 時 00 分 水防(防災)1 号指令発令(市職員 247 名) ⇒災害対策本部設置

23 時 00 分 水防 1 号指令解除 別に消防団 420 人出動

10 月 21 日

2 時 00 分 待機配備体制解除 (水防・防災担当職員のみ待機)

9 時 00 分 災害対策本部解散

災害救援に携わって



講師 特定非営利活動法人
日本災害救援ボランティアネットワーク
理事長 田 中 稔 昭



話のながれ

- 1 災害は新たな文化を創造する
- 2 日本災害救援ボランティアネットワークについて
- 3 ボランティアの特性(自発性・無償性)
- 4 ボランティアは誰にでもできる
- 5 ボランティアの実力
- 5 災害態様によって活動が変わる
- 6 高校生のボランティア活動
- 7 海外の事例
- 8 コミュニティ放送の重要性



災害は新しい文化を作る

- ボランティア元年と言われた阪神・淡路大震災
- 阪神・淡路大震災では失ったものが多い。しかし、得たものもある。
- 「災害文化」ということばがよく使われるようになった。
支えあい助け合うという「災害文化」
- 阪神・淡路大震災は「災害ボランティア活動」という新しい文化が芽生えた。



日本災害救援ボランティアネットワーク

- 設立 1995.2 西宮ボランティアネットワーク
- 法人 1999.4 特定非営利活動法人
- ミッション
阪神・淡路大震災の教訓を後世に伝えること。



ボランティアの特性

- ・ボランティアの無償性
- ・ボランティア活動の自主性

災害ボランティアは誰にでもできる

- 災害ボランティアは、例えば地震のメカニズムを知っていなければいけない。
 - 天気図が読めなければいけない。
 - 救急救命についての知識・技能が必要
-
- 知識、技能を修得しているに越したことはない。しかし、災害ボランティアには特別知識・技能がなくても十分活動できる。
自分の持てる力を出すこと。



ボランティアの実力

- 地域防災計画には、「災害時ボランティアとの連携すること」というような記述がある。
- ボランティアにどのようなことを求めているのか具体的に書いてはいない。
- ボランティアは、計画されていない部分、予定されていないことを処理する。
- それが実力でなかろうか



災害の態様によって活動が変わる

災害態様とは

- 地震
- 津波
- 風水害(台風・竜巻・高潮)
- 火山噴火
- 旱魃、冷害

- 人為的災害(A＝原子力、B＝バイオ、C＝ケミカル)
- 航空機・列車事故



高校生のボランティア活動

- 日本海重油流出事故災害
- NVNADでボランティアを募集したところ、若者が大勢参加申込があった。重油は有害物質を含むということで、中学生以下はお断りした。
- 阪神間から無料バスを運行
- 防災関係の新聞にある人が「中・高校生の活用」と言っている人がいる。行政でもボランティアを活用するという言葉方をしている。
活用という言葉方は好きではない。

1999年トルコ・マルマラ地震

- 学んだこと **連携すること**
- 日本・トルコ文化協会との連携
- NVNADは災害救援の経験はあるが、トルコとのつながりがない
- 日ト協会はトルコとのパイプはあるが、災害救援の経験がない
- 両者の得意とするものを出し合って救援活動をした。



1999年台湾地震

- 学んだこと 平時から準備することにより被害を小さくできる。
- 目的 阪神・淡路大震災の教訓が活かせるか
- 見事な救援体制 学ぶことが多かった。
翌日には救援センターが立ち上がり、多くのボランティアが活動していた。



コミュニティ放送

- コミュニティ放送は、被災者が知りたい情報を伝えてくれる。その地域でしか通用しない情報。全国ネットでは取り上げられない情報
- 言葉の分からない外国人に、母国語で情報を提供するのにもコミュニティ放送
- 電波が届くエリアは狭いが、必要とする身近な情報を届けられるのがコミュニティ放送
- 災害時に実力を発揮する。なくてはならない存在になる。

「スマトラ沖地震・スリランカ津波被害を経験して」

関西学院大学 総合政策学部

岡本 有未 氏
古井 健斗 氏

スリランカ

•人口 20,064,776 (2004 年 7 月)

- － 0 歳～14 歳 25%
- － 15 歳～64 歳 68%
- － 65 歳以上 7%

•宗教

- － 仏教 70%
- － ヒンドゥー教 15%
- － キリシト教 8%
- － イスラム教 7%

私たちの活動（津波以前）

- UNV = 国際連合ボランティア計画
 - － UNITeS= 国連情報技術サービスのインターン
 - － スリランカ南西部パナデュラ市に派遣
- 活動内容は
 - － 地元 NPO の情報教育支援
 - － 英語教育
 - － 地元教職員の養成
 - － 課外活動

ツナミ被害 全壊した建物 津波被害の実体験

- 現地時間 2004 年 12 月 26 日朝 9 : 00 頃
 - － スリランカ全域で津波発生
- クリスマス休暇中
 - － 多数の外国人旅行者
 - － 浜辺近くのホテルに多数の利用客
- スリランカ初の津波被害
 - － 知られていない言葉 “ 津波 ”
 - － 事態を収拾できない地元

私たちの12月26日

- ホテルから脱出
 - － 1階部分が完全に床上浸水
- 荷物をまとめ高地へ避難
 - － やや標高の高い近くの民家へ
 - － パニック状態の現地人・旅行者
- 交通は完全に麻痺
 - － 主要道路・鉄道は寸断

26日午後

- 錯綜する情報
 - － 現地語放送のラジオ
 - － 震源がオーストラリア、日本、東南アジア
デマ・情報が二転三転
- 携帯電話回線がパンク
 - － 国内への発信が不能

最寄の街へ

- 近隣の都市、ゴールへ向かうが・・・
 - － 5km 北の街を目指し徒歩で移動
- 激しく損壊した建物、転倒した電柱
 - － がれきの山を裸足で歩く被災者
- 多数の死傷者
 - － パニック・ショック状態の人々 ゴール市は壊滅
- ゴール市を脱出した避難民からの情報
 - － 市は完全に水没
 - － 多数の死傷者
 - － 交通機関（バス・鉄道）は全線不通
- 近くの避難所へ
 - － 高台にある仏教寺院に避難
 - － 新たな津波到来の予報

避難所では

- 地元の人たちによる炊き出し・ご飯
 - － 白米とカレーを新聞紙に包んで分配
- たくさんの外国人旅行者
 - － 行方不明者の搜索作戦
 - － 人名リストを作成

12月26日夜

- 避難所・ウナワテユナ寺院で野営
 - － 寺院から支給されたゴザで寝る避難民

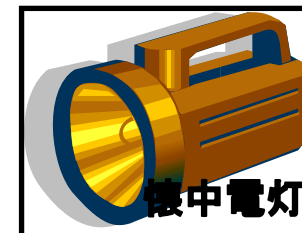
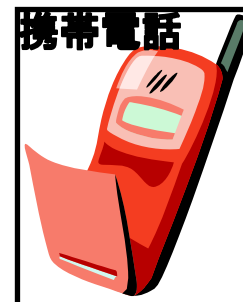
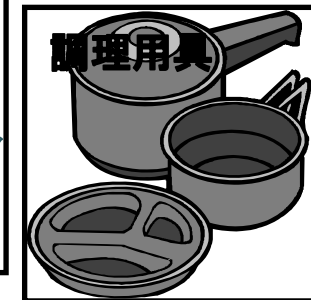
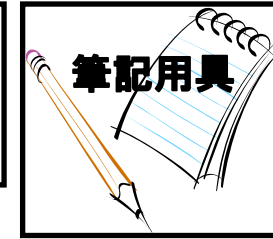
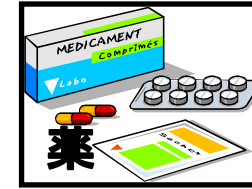
12月27日

- 進路を内陸へ
 - － ゴール市壊滅
 - － 内陸の都市ラトゥナブラを目指す
- ヒッチハイクで移動
 - － 内陸部でも深刻な物資枯渇
 - － ガソリンなどの流通が麻痺
- 運転手にお金を渡しヒッチハイク
 - － 夕方すぎラトゥナブラへ到着
 - － ホテルで一泊

12月28日

- ラトゥナブラからバスで移動を試みるが
 - － バス停はたいへんな混雑
 - － ダイアが麻痺
- 半日バス停で待つ
- 夕方ごろ活動本拠地パナデュラに帰還
 - － 勤務地の寺が避難所に
- コロンボ在中の国連職員と連絡
 - － 被害の正確な規模がはじめて明らかに





早く逃げないと波に家をのみこまれてしまいます。なんとか命を守るために必要な荷物だけを持って高台に逃げなければなりません。グループで話し合って12個のアイテムを1分半でカバンに詰めてください。

(略)

水や食べ物を持っている人は1つカバンから一つ取り出してください。持っていない人は、お店はないので誰かと交換するために他のアイテムを一つカバンから取り出してください。

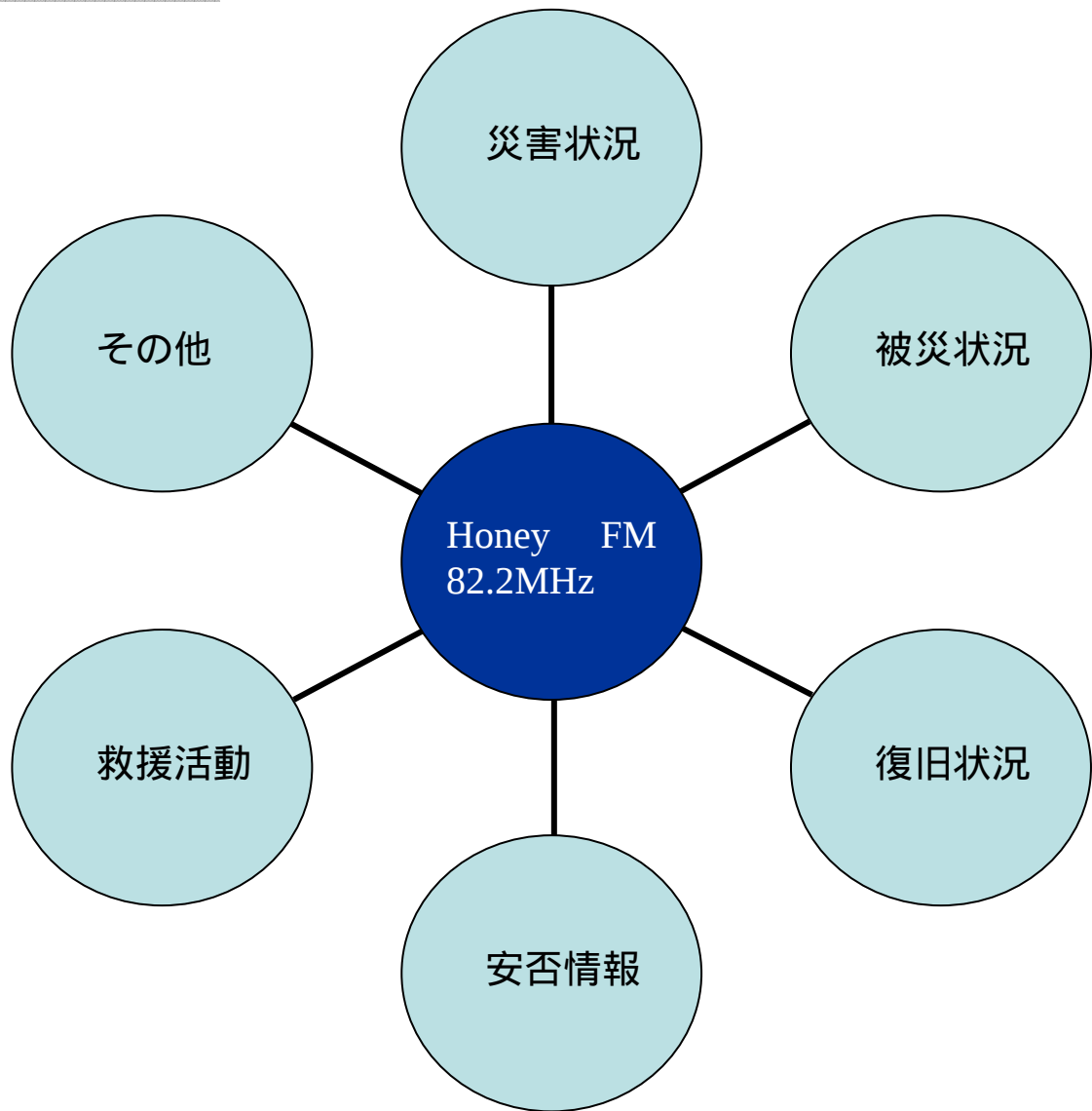
(略)

やっと避難所にたどり着きました。そこには世界中から食料や毛布が届けられていました。あなたたちは最低限の寝具をもらい、しばらくの間その避難所で生活することになりました。しかし今までと比べると、とても不自由な暮らしが始まりました。いつになったらもとの生活に戻れるか、まったく分かりません。

災害時放送ボランティア講習会

災害時に情報を補うため、地域 FM は被災者の目線で情報を放送するという大きな役割があります。その中でスタッフと共に活動する災害時放送ボランティアを養成する講習会を開催しました。

FM の役割



講 習 会 内 容

《 開 催 日 》

2005 年 7 月 30 日（土）

《 場 所 》

FM 放送(ハニー F M)スタジオ （ 株式会社エフエムさんだ本社にて ）

《 時 間 》

13：30～15：30

《 参加人数 》

12 名

《 当日の進行状況 》

13：30 災害時におけるラジオ放送の役割について

 昨年の災害時放送実績

 「新潟県中越地震」における FM 放送(FM ながおか)の動き

 FM 放送(ハニー F M)非常災害時特別放送実施マニュアルの説明

 緊急放送切り替え手順の説明

14：00 災害時緊急放送コメント、レポートコメントの説明

 災害時緊急放送シミュレーション

15：10 懇談、Q&A

15：20 ハニー特派員について

15：30 終了

当初対象にしていた、高校生はすくなくったのですが中学生に加え、また、シニア世代を交えた成人の方にも参加して頂き、上記のスケジュール内容で、講習を行いました。

今回の講習会に参加することで、FM 放送(ハニー F M)における緊急時の体制、スタッフの役割など市民の皆さんに理解していただけたとともに、情報の重要性も認識して頂いたという事で、早速、災害時には情報収集などで活動していただきリスナー特派員として登録して頂きました。

FM 放送(ハニー F M)のスタッフも、今回改めて災害時の動き、またそれぞれの役割について再認識する事ができました。

- 災害時におけるラジオ放送の役割について
災害時もっとも重要になる「情報」 テレビ、新聞では対応できない事柄も簡単な電源、機器で対応できる媒体“ラジオ”の重要性などを解説
- 昨年の災害時放送実績
去年は台風の当たり年と言えるほど三田市に襲来しました。その中で HoneyFM がとった緊急放送やスタッフの動き等の解説
- 「新潟県中越地震」における FM 放送(FM ながおか)の動き
地震発生時の FM ながおか局内の様子、第一報の放送、緊急放送への切り替え、地震後の番組体制などを紹介
- 「FM 放送(ハニーFM)非常災害時特別放送実施マニュアルの説明
FM に設置している災害時放送マニュアルの解説や災害発生からスタッフ招集、緊急放送切り替えまでの手順の解説
- 緊急放送切り替え手順の説明
実際に機器操作をして緊急放送に切り替える手順を説明
- 災害時緊急放送コメント、リポートコメントの説明
非常災害時特別放送実施マニュアルに沿って放送するコメントの紹介
リスナーに必要な情報を的確に伝える為のマニュアル
- 災害時緊急放送シミュレーション
緊急放送を想定して、実際にスタジオ内で講習会参加者に緊急コメントのアナウンスを体験
- 懇談、Q&A
放送、スタッフに関する質疑応答や、災害時における放送体制についての意見交換
- ハニー特派員について
身近な情報や街の情報などを発信してくれるリスナーリポーター（ハニー特派員）の説明

《行動を指示する発災直後の緊急コメント例》

- ゆれている最中（発生から１分経過くらいの間）

有事の沈黙は不安が募るもの。

見たままを落ち着いてゆっくりリスナーの不安を静めるコメントを。

『地震です。』

『FM 放送(ハニーFM)のスタジオはかなり揺れています。』

『落ち着いてください。』

具体的な行動の指示。その理由もふくんだコメントを。

『テーブルや机の下にもぐって様子を見ましょう』

『火事が心配です。火を消しましょう。ガスがついていませんか？ストーブは消しましたか？』

- 揺れがおさまった後（１分経過～３分後）

行動の指示に続いて、行動の確認を促すコメントを。

『火は消しましたか？ガス、ストーブ、湯沸し器、風呂場、アイロンなどは大丈夫ですか？家族が声を掛け合って、もう一度確認してください。』

- 震源地や震度が判明（３分経過～１０分後）

具体的な指示のコメントを何度も繰り返す。

『今、電気や水道が使えるところでも、念のため懐中電灯や携帯ラジオを用意してください。今のうちに水を溜め置きしてください。飲み水やトイレの水を容器に溜めておいてください。』

講習会風景



災害放送における FM 放送の課題

1. 取材体制の確立

NHK や民放テレビ局などは独自に報道部局をもっており、現場取材・中継リポートなどで状況を伝えていきますが、ラジオ局、特に FM 局(在阪キー局やコミュニティ局)などは独自の報道部局を持っていないのが現状です。

そこで問題になるのが災害時の情報収集、現場中継リポートなどの体制がとれるかどうかです。当然 FM 放送スタッフが取材したり、情報を収集したりしますが、市民からの情報提供というのも大きな役割を果たすと考えられます。

また、情報入手先の現場が混乱していると情報の確認不足や未確認の為、すぐに放送できないなどのケースが生まれます。この場合 FM 放送としては、情報の確認がとれるまでは、マニュアルにあるコメントを繰り返し放送することになります。

2 リスナー組織の拡大

災害時には市民からの直接情報も大きな役割を持つことになります。

そこで、FM 放送ではリスナー組織を設置しています。今回のような講習会を年に数回開催し、多くリスナーに参加してもらい、災害時には、情報収集などで活動していただきます。この時必要な災害時の情報収集項目などについてのマニュアル化はこれから整備していく必要があります。

3 24 時間放送の維持とその後の放送

FM 放送における災害発生時の緊急放送は、現在のところ少人数で対応しなければならないというのが現状です。ここで問題なのが、24 時間生放送を即日実施、スタッフの確保、災害放送中の営業収入が入らない、という事です。スタッフと放送体制の維持については、これからの組織作りで解決できますが、災害後の収入源確保はきびしい状態になると考えられます。その為にも行政の支援や保証が不可欠だと思います。

4 連携の強化

行政、消防、警察、自治会等と情報共有の強化を図っていきたいと考えています。

災害時には確実、的確な情報を迅速に発信(放送)する事が必要とされるので、今後は情報を共有する機関と合同の講習会をもち、各協定や連絡網の充実を図っていく必要があります。

実践団体 ： **三田を知る会**

669-1322 三田市すずかけ台3-5-4-10-705

TEL/FAX 0 7 9 - 5 5 9 - 4 3 0 0

Mail sakais@jttk.zaq.ne.jp